


 書評

斎藤環 著+訳

オープンダイアログとは何か

小林隆児

著(訳)者の熱い思いが全編に流れているせいもあるだろうが、久々に精神療法に関して大きな話題となるのではないかと期待される書である。オープンダイアログは「急性期精神病における開かれた対話によるアプローチ」とも呼ばれ、発症初期の精神病を主たる治療対象として、フィンランドの西ラップランド、トルニオ市で行われている地域精神保健活動で、公費医療の対象ともなっている。本書は著者による噛み砕いた紹介と、この活動を中心に行っている臨床心理士セイックラ氏(原著者)らの主要な論文3編の訳からなっている。

著者のみならず読者をも驚かすのは、これまで常識とされてきた薬物療法と入院治療中心の精神病治療を根幹から覆しかねない内容を孕んでいるからである。患者、家族からの治療要請があれば24時間以内に彼らの要望する場所に治療スタッフ(3名程度)が出向き、その場で患者関係者とともに互いが対等の立場から自由に語り合う。最大の特徴はこの緊急対応の姿勢である。時には入院や薬物療法を補完的に用いることはあっても、基本はあくまで開かれた対話である。必要があれば毎日でも実施される。

急性期の精神病患者はあらゆる外界刺激を圧倒されるほどの侵襲性を帯びたものとして体験している。そのため恐怖の対象の姿かたちを捉えることができない。対話を通して、それをかたちあるものへ変えることを目指す。オープンダイアログの治療の核心である。

オープンダイアログは、ポストモダン思想(その中心にあるのは、コミュニケーションによって現実が構成されるという社会構成主義)を背景に、ダブルバインド理論で有名なグレゴリー・ベイトソンとその影響から生まれたシステム論的家族療法を源流に持ちつつも、これまでの家族療法とは一線を画した治療論を持つ。従来の病理的視点を廃し、治療者、患者という立場は保ちつつも、互いに正直かつ

誠実に向き合い、共通理解を目指す。そこでは自ずから専門用語ではなく日常語で語り合う。

治療の成否を決定づける対話の質は、語られた内容の事実関係を確認するといった「問診」ではなく、あくまで患者(関係者)が語っている思いに照準を合わせて応答することにある。「面接で着目すべきことは、患者が何を語るかではなく、いかに語るかである」とは精神分析家 Daniel Stern の言葉であるが、それとも呼応する視点である。そこでは身体が発する多様な声に耳を澄ませ、その思いを感じ取ってメタファで返すことが大切になる。

この治療法で最大のポイントは、強い情動不安に圧倒されている患者や家族とともに治療者もその場に身を置きながら持ちこたえつつ、声にならない声をどのように聞き分け応じていくかということにある。とするならば、その際の治療者の情動体験を介した治療的な関与の質が問われ、体験の内実を意識化して明確にすることこそ治療機序の解明につながるはずである。原著者はその点について、参加者全員が患者や家族の情動不安をとにもするというプロセスが生じることが言葉を紡ぎ出す契機となり、そこで生まれた参加者の言葉やしぐさは強い感情の表現へと変わっていくと述べ、それを「愛の体験」と称している。評者の臨床経験と照らし合わせるならば、まさに本来の「甘え」体験とっていいのではないか。本治療は情動水準でのコミュニケーションに照準を合わせることで信頼関係を構築することを目指したもののだが、「甘え」文化を身に纏ったわれわれ日本人にこそ実感を持って語れる世界である。その意味からもわが国での本書出版の意義は大きい。

(西南学院大学人間科学部)

●A5 208頁 2015 定価:1,800円+税 医学書院刊